

## 創造性はどのような仕組みでレベルアップするか

近年、どこの大学でも学生の教育目標として創造的な研究能力を育成することを掲げている。創造性がこれからの社会を生き延びるために必要不可欠なものとされているからだ。グローバル化が進み、より人件費の安い国へと多くの仕事がアウトソーシングされる現在、資源の乏しい日本は創造的な研究能力の育成が急務である。

「創造性」は、どのような仕組みでレベルアップするのだろうか。ここでは、ノーベル賞を受賞した4人の科学者を中心にこの問題を追究していく。

1973年にノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈博士は、失敗は創造力育成にとって重要な役割を果たすと述べている。英語には「クリエイティブ・フェイラー」という言葉があるように、彼らの文化では失敗を創造の肥やしにするというのである。そのときは失敗に見えたことが実際には新発見のきっかけとなり、その後の成功につながる。そのような予想外の幸運な発見をする才能を「セレンディピティー」と呼ぶ。

2000年から3年連続でノーベル化学賞を受賞した研究者が全員「セレンディピティー」について述べていた。00年に受賞した白川英樹氏は、大学院生が偶然に触媒の濃度を間違えたことが電動性ポリマーの発見につながったという。また、02年に受賞した田中耕一氏も、実験中に間違えて偶然に二つの溶液を混ぜたことが新発見に結びついたそう。01年に受賞した野依良治氏は「独創的研究に必要な科学者の資質は知性だけでなく、感性が必要」とし、さらに「論理の積み重ねだけでは大発見はできない。偶然のきっかけをつかむことも科学者の能力の一つだ」としている。創造にはセレンディピティーは不可欠な要素なのである。

セレンディピティーは英国の作家ウォルポールの造語で、スリランカ（セイロン）の寓話に基づいている。それによると、この国の3人の王子が王の命令でドラゴン退治に行ったものの失敗し、その代わりに、冷静な観察と知恵で多くの人々を救済してきた。王から頼まれたことは果たせなかったが、立派に成長したことが何よりの宝物だと、王は迎えたという。失敗をただの失敗で終わらせるのではなく、それを生かして創造することが重要だということである。

以上、創造的能力の育成について、ノーベル賞受賞者を中心に述べてきた。このことから明らかになったのは、創造性のレベルアップにはセレンディピティーが重要な役割を果たすということである。失敗をただの失敗で終わらせるのではなく、そこから創造を生み出すことこそ創造力育成の要なのである。